



和清山香 校學門田上野 會專曲市上野 所刷印 所刷印

日四十二月五年三十和昭 (可認物便郵)

嗚呼金子英雄先生

本校教授理學博士金子英雄先生は風邪の爲め二月五日より臥床、一時小康を得られ十二日及十四日には出勤され講義、實習等を受持たれたがその無理が祟つて再び悪化し更に肺炎を併發し廿四日午後十時遂に卒去された。享年四十四才。先生の訃天聽に達するや生前の功に依り特に正五位に追陞された。先生は諏訪郡中洲村出身で諏訪中學、東京高等師範學校を経て東北帝大理學部化學科を卒業東京帝大々學院にて無機化學を專攻、傍ら東京高等工藝學校講師、中央氣象臺附屬測候技術官養成所講師、東京府立第三高等女學校高等科講師を歴任、大正十五年十月本校教授となられたもので昭和十年一月には「セリシンの膠質的行動に就きて」の東京帝大提出論文にて理學博士の學位を授けられ更に昭和十二年四月には蠶絲學會の最高賞たる蠶絲學賞を授與せらるゝ等母校に於ける唯一のホープであ



影遺生先雄英子金

故金子先生葬儀

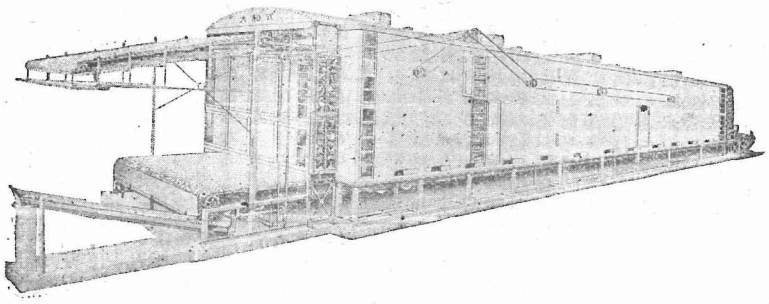
故金子先生の本校に依る葬儀は肌寒き二月廿八日午前十時より本校講堂に於て御

針塚校長弔詞

嗚呼昭和十三年二月二十四日は如何なる不幸の日ぞ。我々に此人ありとして大に誇りとし我々の最も敬愛せる我故教授正五位理學博士金子英雄君突如病を以て長逝せらる。悲哀全校に充ち茫然自失暫し言ふところを知らず。唯昊天の無情を怨み空しく長嘆息するのみ。嗚呼悲哉。今日茲に君が十二年間に亘りて親みたる我故の講堂に祭壇を設け清酌庶羞の饗を供へて全校職員學生等しく哀悼痛惜の至情を湛へて恭しく君の英靈を祭る。君資性明敏穩健中正の美德を具へ、大正二年郷里諏訪中學を卒業して東京高等師範學校に入り卒業後續いて研究科に入り更に進んで大正七年東北帝大物理學科化學教室に入學し業を終へて大正十年五月東京帝大大學院に入り専ら無機化學を

遺族、本校職員生徒全部出席し嚴かに舉行された。講堂正面の壇上に祭壇を設け先生の御寫眞を掲げ左右には上田蠶絲專門學校一對、上田蠶絲專門學校同窓會一對、蠶絲化學教室一同一對の花輪が飾られた。式は僧侶の讀經に依りて開始され校長の弔詞となるや感極りて言葉の杜絶える事しばし、滿場涙を呑んだ。引續く千曲會代表蒲生俊興氏、生徒代表柳澤柳二君(初三)辯論部代表宮田修君(初三)、天龍會代表小松忠幸君(初三)の涙と共に讀む弔詞に一同嗚咽するのみであつた。次で依田庶務課長に依る弔電一三五通の披露ありて焼香となり御遺族、弔詞を讀んだ人々の順に焼香あり、最後に令兄光司氏より謝辭があつて十一時終了した。金子家に依る告別式は同日午後一時より市内新田海禪寺に於て舉行された。一時より二時迄は參會者受附、午後二時より引導渡し讀經が行はれた。參列者は御遺族の外、東北帝大化學同級生代表として藤々御弔問せられたる河上益夫氏(理博東京工大助教)本校職員學生約五十名其他にて八十餘名に達し僧侶の讀經に引續き河上益夫氏、日本赤十字社々長(和司教授代讀)、日本化學會々長(古谷教授代讀)、蠶絲化學教室代表井上教授の弔詞、次いで御遺族、針塚校長、河上氏、井上教授、千曲會代表香山助教、生徒代表早田充利君(初三)、辯論部代表宮田修君(初三)、天龍會代表小松忠幸君(初三)、組合代表、一般の順に焼香ありて嚴肅裡に終了した。

現代乾繭機界ノ王座 大和式自動輸送乾繭機



【各種型錄贈呈】

二五九八年代表型

製作發賣元 株式會社 大和三光商會 東京京橋區京橋三丁目二番地 電話京橋(56)五三二〇番

- 營業課目 機機置口 乾燥裝イ 裝置器 乾燥箱 乾燥機 淨水 湯吸 高壓 自動式 自動式 自動式 自動式 自動式 自動式 自動式 自動式 自動式 自動式

研究し此間傍ら或は東京高等工藝學校に或は中央氣象臺附屬測候技術員養成所に講師として囑託せられ至るところを令名を博す。大正十五年十月我故の教授として赴任せらる。爾來今日に至る迄十一年五ヶ月の間啓勤精勵一日の如く克く生徒教授の任に當り尙別に或は生徒主事として或は校友會辯論部長として君を煩はし多大の功績を擧げられたるは深く感謝するところなり。君は旺盛なる研究心を有し日々其の専門とする絹絲及人造纖維に關する化學的研究に没頭し發明するところ多し其の最新の研究の已に發表せられたるもの優に十を以て數ふ。纖維の膠質化學的研究者として現代實に君を以て第一人者となす。洵に斯界の權威として中外に認識せられ學界並に實業界に與へたる裨益甚だ大なり。特に最近二三年間に於ける君の研究は最も劃切なる事項を把りて徹に入り細に涉りて特殊の創作性を發揮して學界を指導し其の恵に浴せしめたること枚擧に遑あらず。宜なるかな昨春

東北帝大化學同級生代表 河上益夫氏弔詞

噫、金子英雄君よ、君と共に仙臺の學...

母校蠶絲化學教室代表 井上柳梧氏弔詞

今日茲に理學博士金子英雄君の柩前に...

千曲會總代蒲生俊興氏弔詞

上田蠶絲專門學校千曲會員一同謹し...

生徒總代柳澤柳二君弔詞

滿月の皓々たるは妖雲に遮られて...

辯論部代表宮田修君弔詞

昭和十三年如月の行く風未だ肌寒き...

千曲會總代蒲生俊興氏弔詞

上田蠶絲專門學校千曲會員一同謹し...

生徒總代柳澤柳二君弔詞

滿月の皓々たるは妖雲に遮られて...



母校天龍員代表 小松忠幸君弔詞

鳥帽子の雪未だ消へず千曲の流れ 未だ温やがる如月二十四日、突如先生の...



族遺御と生先子金

故金子先生の著書と報文

Table listing books and articles by Kinoshita Sensei, including titles like '日本化学會誌に於ける...' and publication details.

Large table listing various scientific papers and books, including titles like '同(其九)セリシンの酸化抵抗性...' and 'Chemical Institute, Faculty of Science, Tokyo Imperial University...'.







東京中央氣象台技師 理學博士藤原平氏より
思ひもかけぬ御報に接し驚入り申し候。かねて病氣の事も存じ上げず突然の御事にて唯々驚入り申候。御皆様の御嘆きの程も如何ばかりと御察し申上げ候とも申上様も無之、御氣の毒様に申上候。別紙は心ばかりに候へども御佛前へ御供へ被下度候。先は不取敢御悔進申上候。

東京文理大教授兼臨海実験所長 福井玉夫氏より
御尊父様には去る廿四日御他界遊され候趣實に驚入り候。御病氣には不可抗力と申しながら尙春秋に富ませられ、學界にとりても亦家庭にとりても大切な方を亡はせられ候事は實に痛恨の至り候座候。御家族の皆様の御愁傷甚重にも拜察罷在候。小生は東京高師にて御尊父とは一年前の同窓に有之、際にては同じ端艇部に籍を置き至そ、隣り合せに候ひしも、朝夕親しく御交誼相願居り候もの有之候。卒業以來は所異り候爲度々御目にかゝる機会も少かりしも御尊父様の御人格御學問には常に敬服致し居り候。只今幽明境を異にし實に哀悼の情に不堪るもの有之候。別紙小稿甚だ僅少に有之候。乍畧儀以書中謹而哀悼の意を表し申候。

松高校長西川順之氏より
拜啓御尊父様には豫而御病氣の處處生相叶はせられ去月廿四日御逝去遊ばされし由承り得入り申候。前途多忙の御身を以て空しく御他界遊ばされしは學界のためにも大なる損失にて洵に痛惜哀悼の至りに堪へませぬ。尙御遺族様には人生の最大不幸に遭はせられ御愁傷の程御察し申上様。御慰めの言葉もなき御同情を増すばかりです。然し生死は人力の不及處此の上は皆々様一層御奮勵、御志を遂げらるゝが何よりの追福と存じます。取り敢へず御弔問申上げ度く斯の如くであります。

東京文理大教授和田猪三郎氏より
多望なる將來を有せられたる金子博士の訃報に相接して悼情の情に不堪、皆様の御愁傷如何ばかりかと拜察仕り謹而御悔進申上候。
奈良女高師校長稻葉彦六氏より
御尊父の御逝去の趣拜見驚入り申候。皆様の御愁傷の程御察し申上候。常に御健勝御研究の處處か御計音痛惜に不堪、不取敢書中御悔申上度如斯御座候。以上の外大村長野總知事の弔問を始めとして本多東大村長野總知事、太秦男爵島利行博士、田所哲太郎博士、太秦男爵(北大教授)等學界、蠶絲學界及教育界の知名の士より百數十通、それに弔電三百餘通に達するあたり、先生生前の知友の如何に多かつたかを知る事が出来る。學友間に於いても常に好感をもつた此度の卒去に際しても新聞紙上にて知つたのみにて已に東京高師を代表して小野田忠氏、東北帝大化學友を代表して河上益夫氏の馳せ参り先づ弔問、續いて遺族の將來を共に憂慮する點から考ふると亦故人生前此の方面を偲ぶに足る。

若溪會より
承り候へば金子英雄様には過日御逝去の趣御愁傷の御事と奉存候。之迄永く斯道の爲め御盡瘁相成候御功績を顧み又斯界に御貢賦被遊將來を察し一入哀悼の至りに不堪候。茲に謹而弔意を表し御悔申上候。

理化學研究所より
御尊父金子英雄教授御就職之趣御報知に接し痛悼の至りに不堪候。特に時局重大の折柄爲邦家一大損失にして且御家族の御愁傷同情に不堪候。茲に謹而御哀悼申上げ御冥福を祈上候。

知らせてくれた。それは大變と子供に別れて金子宅に駆けつけた際は已に死の直前の大苦悶の最中であつた。斯くして金子教授にとつて見れば自分の厄介になつて居つた校長の所へいの一歩に自分の臨終を知らしたことに考へられる。

六、種々な思ひ出
(1) 先生の一生は全く努力に盡きて居つた。従つてその馬力の出方が非常なものであつた。大學院在学中に已に恩師柴田先生の徳澤によつて『油の研究』なる學位論文提出の準備は出来て居つた。計らずも上田に参る事になつた際、多くの學友の薦むるのを退けて曰く『上田に御厄介になるからには上田の學校のための學位でなければ意味を爲さぬ』と。而も平然として赴任せられ、馳せて『絹イシの研究』にて學位をとられた様であつた。如何にその性来の恬淡であつたか窺ふことが出来る。その後上田にあつても朝から晩まで書類から眼をはなさなかつた様な日は幾日もあつた。而も明快なる判断力と抄録方法とは相補して今日の大爲した蘊蓄の礎であつたのだ。先生の恬淡性は東京地方幼年學校在職中のエピソードを開いてもわかる。斯様な性格から來た教育方針を察せられて恐れ多く當時生徒であつた山階宮殿下から金一封を賜つた事も洩れ承つて居る。

五、靈に招かれて
校長よりお聴きした話だが、廿四日晩、何時も訪ねて來た事のない松岡先生(學校講師)の小さい子供が突然やつて來た。餘り出し抜けて先生は面喰つた様で『如何したか』聞いて見れば只々『遊びに來たか』と家へ歸つて叱られる。此の儘にては家へ歸つて叱られるから、歸る時は誰か一緒に送つて行つて貰ひたい』と子供心に云つて居つた。そこで暫時の後校長先生自身を送り届けて二人の子供を連れて、北上田驛の踏切に差しかつた際正面から來た、矢庭車が突然止つた。はつと思つた際、矢庭車が突然止つた。はつと思つた際、矢庭車に森院長が車から降りて金子教授危篤を

ある。亦御自分で著書に關する限り『に於けるは申す迄もなく、長兄光司氏は矢張り東京高師出身で傳物に造詣深く、舎弟直衛氏は東大文科出身、目下武藏野高師教授にて東洋史の研究に精進せられて居る様である。只次兄のみ郷里に踏止まりて實業に従事して居られる。遺兒も今は何れも幼少なれど恐らく之等の天恵の才をもつて遺志に添ひ得るものとならう。又なつてははねばならぬと蔭ながら祈つて止まぬ。

七、研究
僕が先生の講演を聞いたのは昭和八年夏の同窓會主催の記念講演會であつた。『セリシンの物理化學』と云ふ演題であつた様に記憶する。物理方面の講演は別として此種講演でこんなに難しいものは始めてであつた。恐らく聴講者の多くがボカんとして徹頭徹尾解らないで居つたらう。私の物理化學方面への癖は高師へ入つた時に已にあつたが、此の講演で油を注いだ感があつた。其の後計らずも縁あつて昭和九年一月から先生の研究室に御厄介になつて、御指導を仰ぐ事になつた。油の研究、蠶絲學を仰ぐ、及共同研究は實に興味深く、参考にもなつた。やがて仕事は山積して何時も人となつたのを託つたものだ。然し校長先生始め諸先生の御援助、御高配には常に感謝して居つた。従つて油の研究、蠶絲學の研究もプランは出来たが、遂に概要のみに終り遂に深入りすることが出来なかつた。而して最近には絹イシの研究を緊急問題として努力して來られたるも、それも未發表分を幾多遺して逝つたのは誠に残念だ。

顧るに昭和十年九月本校創立廿五周年記念祭の陳列品中に加ふるべき蠶絲の精製セリシンA及びBとファイアロインとを造らんと僕と共に實驗中、僕の實驗失敗からファイアロイン分離に異状を發見したのが『絹イシの研究』の端緒であつた。それ以來、共に層一層之に興味を加へて今日に至つたものである。僕から見れば石油(即ち油)の研究も、蠶絲學の研究もファイアロインの研究も共に研究者の本体を失つた感があるが今後機會をとらへて及ばずながら之を完成して學會へも發表し故人の遺志に添ふと同時に、生前の御懇切な御指導に報いたと思ふ。(一九三三、三、九、二七忌に靈前に供ふべく)



金子先生と僕

香山清和

僕が母校へ出戻つたのは昭和六年の秋であつた。卒業して十年近くも外に居た僕にとつては校内には顔も名も知らない幾人かの先生が出来てゐた。金子先生もその一人であつた。僕が本校に來られたのは大正十五年で、先生が卒業したのが大正十三年であつたから丁度入れ換りになつた様なものだ。

僕が學校に來て何日か経過し四圍の情勢からあれが金子先生だと幻げ乍ら驚えその内に何かの機会に口を開く様になつた。然し先生は蠶絲化學教室、僕は紡織科に居るのて語る仕事が無く話す材料が持ち合はさなかつた。唯お互に名前を知つてゐると云ふ程度の交際で時は経過して行つた。

こんな淡い關係で永久に済んでしまふかと思はれた先生と僕との關係はふとした神の戯れから、切つても切れ無い深い關係に引きずり込まれてしまつたのである。僕が昭和八年四月以來内地留學で(と云ふてもプライベート)各地を廻つて歩いてゐる内に當時勤王として隆興しつゝあつたスタープルファイバー工業を見せつけられてすつかりマニアとなつて歸校したのは十月末であつた。そして本校に設置しある人絹工場にてファイバーを作りそれを紡織科の絹紡績機械に依つて紡績せんと企て井上先生に人絹工場の運轉を懇請したのである。當時人絹工場は加美好男氏去つて以來殆んど運轉されてゐなかつたものである。然し世の中はそう自分の都合よく行くものではない。拒絶された。多數なまねばならぬ御研究が山積されて居りそれを僅かな人数でやるのが當然でそんな事をお願ひする方が自體無理であつた。

斯くて第一の計畫は頓坐してしまつた。この上は人絹製造を我々の手でやるか或はこの大それた望みを思ひ切るか二つに一つとなつた。然し思ひ切るには餘りにものぼせ方が激しかった。と云ふて紡績工場に勤務したと云ふ僕の經歷は機械方面には多少の自信があるが化學方面には全くゼロであつた。人絹工場運轉などは思ひも依らぬ處である。この時僕の人絹工場運轉と云ふ野望を極力支持して下さつたのは岡先生と金子先生であつた。岡先生は工場經營の御経験から金子先生は技術方面から極力援助して下さいました。それに力を得ておこがましくも井上先生に人絹工場の借用を申出でたものである。

井上先生も僕の熱意を汲まれ快諾して下さいました。そして校長先生の深き御理解に依つて借用運轉の見込はあつたのである。それは八年十二月末の事であつた。運轉準備の勉強として金子先生の實驗室で小林君一君と共に人絹の試験管の製造實驗を開始した。日が暮れて眞暗になると協力者の小林君が紡績の方へ轉ずるの巴む無きに至り代つて大塚君に來て貰ひ實驗を継続した。實驗を進める一方借用工場の掃除修理を行ひ着々運轉準備を行つた。更に三月に至ると林太郎君の協力、山田君、唐澤正君の参加があり間もなく三宅玉留君も來り急に陣容は整つて五月初旬には遂に待望の廻轉を開始したのである。其後年末には林君、大塚君、山田君を昭和八年に送り人絹研究室は三宅君、藤田君等に依りて運轉を繼續し更に十年の暮にはその兩君をも日本人織に送り、其後多くの人々が來り又去つて現在では湯原君、福本真雄君がその掌に當つてゐる。

斯くの如く人絹研究室は多くの人の動きがあつたが常に金子先生の指導を仰いでゐた事には變りはない。即ち疑問があらば直ちに赴いて教示を受け研究方針は常に先生の方針にあつたのである。昨年末からはバルブ製造も行ふ事になりその設備に取掛り一月廿六日に第一回試作品が出来たのでお祝ひと云ふ事で回試をつた事である。之が先生と僕の顔合せの最後となつてしまつた。二月五日から感胃にて缺勤されたが十二日小豆からたと考へられて無理に病を押して出勤せられた際に、先生の人絹工場に對する御關心はそれ程深くあつたのである。僕はその時は折悪しくお會ひ出来ず誠に残念であつた。

次に先生との關係は尺八がある。岡、谷、野口、小松、小林、湯原、高橋等の諸氏の間に尺八同好會が作られてゐる。今は非常時局と云ふ譯で少し遠慮してゐるが以前は毎月二三回、尺八の先生を呼んで指導を受けたり合奏會を開いたりしてゐた。先生もそのメンバーの一人であつた。熱心な先生は最近では音と云ひ節廻しと云ひととも僕には是れに追いつかぬ位の御上達振りがあつた。そして一月に中傳の免許状を得られた。その尺八同好會も一月廿三日夜岡先生の宅で開いた尺八練習會が最後となつてしまつた。當日の來會者は確か、岡、金子、野口、香山の六人であつた様に覺えてゐる。小松の先生は先生の温かい音色を聴く事の出來ぬのがたまらなく淋しい。先生は諏訪の御出身である。諏訪は有名な言葉の悪い所である。我々が先生と話してゐる時先生の口から「オメエ、そ

金子先生の思出

三 四 郎

此の正月歸省したついでに新田の先生の御宅に御寄りした。いつになく玄關がひっそりとして居るのでもしや先生は留守かなと思つて「御免下さい」と聲をかけた。可愛いお嬢さんが出て來た。チャコンと廊下に座つて小さい手を行儀よくひざの上に置いて、先生は旅行中ですと云ふ。

「どちらへですか」と聞くと「諏訪の方へ行つて居ります」とまだよく廻らない舌で答へた。軽い失望を感じたがそのまゝ自分は上田を去つた。今考へるとあの時先生に御會ひ出来なかつたのが返す返すも残念であつた。二月二十六日開始した先生逝去の事を友から聞いた時實際はつくりつて居るに居なかつた。いつ御會ひしても常に若々しい氣持で話された先生に對する感じは學生時代から少しも變らず、先生から年をとつたと云ふ感じは變らず、先生が病氣したと云ふ事は餘り聞いた事がなかつた。その先生が突然星が落ちる様に亡くなつて了つた。暫くはどうしても本當の事として考へることが出来なかつた。二日たち、三日たつて千曲會からの通知にも接しない、御話を聞く事も出ひする事も出来ない、御話を聞く事に感じられた時、正月御寄りした節に出來たあのお嬢さんの姿が目に入つた。涙がに思へば先生に最後は御會ひしたのは昨年四月、蠶絲會館で日本農學大會の蠶絲學會の學術講演會の時であつた。その時先生は多年研究の功績を以て蠶絲學賞を受けられた。先生の教へられた一人として自分はあの時隨分肩が廣くなつた様な氣がしてゐた。

その後直ぐ講演をされたが、その前先生は「今日はしつかりやらなければいけない」と云はれて居たが、あの講演は先生が大分自重されて居た様であつた。それが先生に御會ひした、そして又講演を聞いた最後になつて了つた。測り知れざる運命の悲しさに感傷無量たらざるを得ない。

自分が先生に接し始めたのは辯論部を通じてであつた。丁度自分が二年の時先生は新入りの辯論部の部長になられた。先生は始めから實に色々事な事に面倒を見て下さり、どんな事でも少しも厄介がらずに注意して下されたのであつた。或時は演題のピラを書いたの字が下手で困つて居ると、直ぐ先生は筆を執つて書いて下さられたりした。

先生の研究室にも幾度か御邪魔した。先生はいつも手にせられて居た試験管を置かれて懇切に相談して下さい、色々指導を興へて下された。先生は常に研究の方が忙しそうだが迷惑そうなら頼みせず、いつも愛用せられて居た朝日なはなかつた自分も真誠ながら悪いとは知りつゝ長居をして終ふ事がよくあつた。先生と共にあの明るく研究室が忘れられぬものとなつた。

辯論部の巡回講演なども先生は必ず皆を引率して行かれた。吾々もどれだけ氣が張つたか知れない。當時自分では随分偉そうな事を云つて、いゝ氣持になつて居たが今思ひ出すと赤面する様な事ばかり云つて居た自分達を先生は嫌な顔もせず、引率されて行かれたのだらうと思ふ。巡回講演に行つた時先生の講演は常に聴衆に深い感銘を與へずにはおかなかつた。生絲の構造に關する難解な研究に誰にも分り易く圖解で説明され、聞いて居る者は皆よく分るので先生の研究の如何に微細なるかに驚嘆して居た。そして生絲が他の纖維に比して如何に優秀なるかを教へられて蠶絲業の將來を感ぜざるを得なかつた。辯論部の巡回講演と云ふも結局は先生の御話が多かつた。自分なども先生に引率されて行つた。教室の講義より此の時の御話の方がよく耳に残つて居る。

三年の時先生に引率されて諏訪の方に行つた。あの時は多分一行六人と和田時を自動車に越えて行つた。運悪く頂上近くなつて霧が深くなり切角の眺望は少しもきかず、植物の説明などを聞かされた。先生に附近の植物の説明などを聞かされた。事にはつきり覺えて居る。それから諏訪に出た伊那の方を廻り豊科の方まで行つた。何處へ行つても至らない吾々の事とそれだけに先生の御恩は忘れられない。

金子先生の思出

三 四 郎

自分が學校卒業後一二年位の間に蠶絲業も色々問題が起きて消滅の憂鬱にならざるを得なかつた。生絲の消費量は人絹に押されて減少する、價格はどん／＼下がる様な状態になつた。誰の云ふ事を聞いても、新聞や雑誌を見ても悲觀材料ばかりで前途には更に光明がない。自分達は一体どうすればいいのだらう。生絲と共に心中するが、それとも他の方面に轉向すべきかなど、云ふ事を眞剣に考へざるを得なかつた。どうして先生の御恩を分らなかつたのであつた。先生に御恩を示されたところ、先生は蠶絲業の實狀を示されて、まだ、悲觀するには早い、なすべき事が大に殘されて居る、やり方一つで蠶絲業の將來は決して悲觀すべきではない、今は一致して此の難關に當る秋だ、と云つて忠告して下さい、憂鬱が一時に吹きとばされて了つた。若し先生の忠告がなかつたらならば自分などは随分色々と迷つた事だらうと思ふ。

其後蠶絲業も種々の對策を奏してかや、小康を呈して來た様に思はれるが先生の忠告はいつ迄たつても臆を銘じて守つて行かねばならぬものであらう。先生は云はれた様に蠶絲業にはまだ、なすべき事が餘りに多く殘されて居る。唯々先生の御逝去が惜まれてならない。

金子先生の思出 三 四 郎

金子先生の思出 三 四 郎

金子先生の思出 三 四 郎

金子先生の思出 三 四 郎

金子先生の思出 三 四 郎

寸楮

くぐりだみ

七人の山岳部員が登頂して難者を救助したと云ふ記事が始めて今日、千曲時報で見た。

なか／＼出来ることではない。スキーをやつたものなら御承知の様に、山で吹雪にやられた位悲惨なるものはない。下手にまごつくとい流のエックスパットでさへも命が危いと云ふことだ。

七君とも練達して居ると云つても上田へ来てからはじめてスキーをはいたと云ふ人が多いのだらう。

自分の身一つを始末するさへ容易でない時に三人の自由の利かない人を救助した努力なんてのは想像にあまりある。山を歩いて居た時分を考へて見ると、全くよくやつたものだ、つく／＼感激させられる。

同時にまた、あゝして吾々が曲りなりに形づくつて来た山岳部の連中がやつてくれたのだな、と思ふと、腹の底から湧きあがつて来るうれしさがある。

西澤も藤田も青木も、清水も田中も寺崎も皆同じおもしろい。ほんとう嬉しく感ずるのだ。自分で植えた花が咲いた様な氣持である。

それはそうとして、君等を実際うらやましく感ずる。救助云々の社會的反應がどうのかわつた云つたらやましさではない。

つだけでも澤山だ。何万人の中の何十人がそう云ふ機會に遭遇する。その中の何人かは逃げ去つてしまふ。その後に残つて歸して事をなし得た何人かの中に君達が入るのだからこれはなんとしてもうらやましいことだ。

吾々が一生かゝつても不可能なものに君達には既に心の底にはつきりとつかんだわけだ。

うらやましい。大いにうらやましい。かつて同じ部に名を置いた一人が、今度の君等の立派な行爲に心から敬意と感謝をさしあげるわけだ。

もう一つ君等の前途の多幸をも祈るわけだ。しつかりやつてくれ。

金子先生が亡くなられた。廿四日だつたそう。風邪から肺炎を併發して到々いけなかつたそう。

昨、廿五日の新聞で見た。蒲柳の質らしくは見受けられたが人間の肉體がそう迄脆いものとは考へなんだ。

そうではないか、この身體の何處かへ彈丸の一發位飛び込んだつて一向、支障を来さん様な氣がする。

金子先生と赤尾先生には度外れの御迷惑をおかけしたものだ。赤尾さんにはまだお目にかゝれるだらうからいゝもの。

中支の蠶業

母核出身某將校

嚴寒の初り益々御多忙の事と御推察申します。御陰様にて小生も無事勤務致し居ります。故に工運搬の状態に依りて原料は山の方面より運搬せし状態に依りて居ります。此はやはり資金關係は英國の爲め思ふ様には知り得られませんが、無錫より江陰、常州間は田より桑園の方が多くなる様に見えます。

常州より江陰、常州間は田より桑園の方が多くなる様に見えます。常州より江陰、常州間は田より桑園の方が多くなる様に見えます。

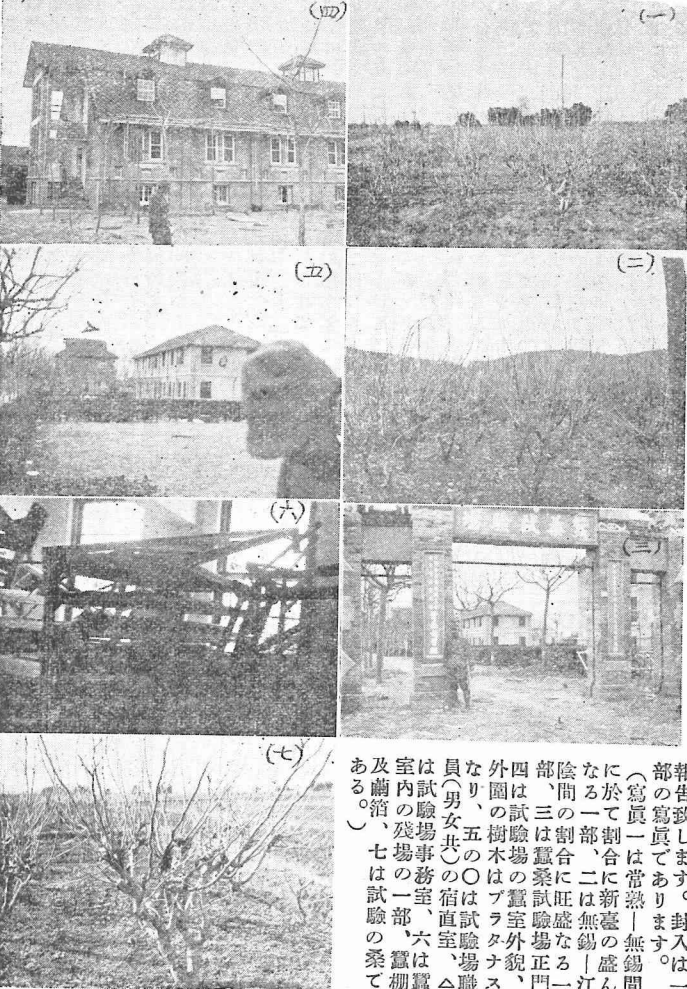
常州より江陰、常州間は田より桑園の方が多くなる様に見えます。常州より江陰、常州間は田より桑園の方が多くなる様に見えます。

常州より江陰、常州間は田より桑園の方が多くなる様に見えます。常州より江陰、常州間は田より桑園の方が多くなる様に見えます。

常州より江陰、常州間は田より桑園の方が多くなる様に見えます。常州より江陰、常州間は田より桑園の方が多くなる様に見えます。

常州より江陰、常州間は田より桑園の方が多くなる様に見えます。常州より江陰、常州間は田より桑園の方が多くなる様に見えます。

常州より江陰、常州間は田より桑園の方が多くなる様に見えます。常州より江陰、常州間は田より桑園の方が多くなる様に見えます。



場がありすが附近には割合に棉の畑を認めません。故に工運搬の状態に依りて原料は山の方面より運搬せし状態に依りて居ります。此はやはり資金關係は英國の爲め思ふ様には知り得られませんが、無錫より江陰、常州間は田より桑園の方が多くなる様に見えます。

常州より江陰、常州間は田より桑園の方が多くなる様に見えます。常州より江陰、常州間は田より桑園の方が多くなる様に見えます。



上田便り

絹織物生産激増 往年の盛況時代を再現せんとする上田市の絹織物生産額は左の如く昨年度九万三千二百五十一圓に達し前年比二万二千六百廿七圓の増加を見たが本年度は試験場に撚絲機が据付けられるので一大躍進するものと期待されるに至つた。

△廣巾物、羽二重一四五二〇碼九一四八圓(單價六十三錢)、生絹其他一一〇〇碼六六〇〇圓(六十錢) △小巾物 御召一五四反一四〇八圓、縮絹及壁一六一九反一二三六〇圓、絹及紗四六反二二六圓、羽二重及生絹四五反三二五〇圓、縮仙及節織五九〇反三七五五圓、其他着尺物三七九反二七三五圓、袴地一四九反一四五五圓、生絹及白絹一九一五反四八九一四圓 △特殊物 帶地七五本二〇五圓、其他一二五一圓

古舟橋架設決定す 千曲川を横断して上田市坂下と中之條を繋ぐ渡船場を撤去して之に替へるに上流百米に古舟橋新設の件は飛行場、鐘紡工場開設と共に必要視されて昨年の市會で議決され縣費補助申請中の處二月一日千九百圓交付の旨通知があつた。延長二十三米、幅員三米六四の木橋で總工費六千四百三十圓、市では近く起債を仰いで着工、十三年度中に完成せしめる筈である。

鐵工業組合強切 先般結成された許りの上田鐵工業機械組合に對し早くも横須賀海軍工廠より七百餘點の製作注文があり尙今後も續々注文があると云ふので業者は活氣づいてゐるが二月四日には同工廠より遠山大佐等が小島鐵工所其他の視察を行つた。更に十一日は在原製作所よりの視察があり相當の注文豫約を行つた模様で年額百萬圓の下請は可能と意氣込

んでゐる。

温電青木線廢止決定 上田温電では二月五日の重役會に於て經營合理化を計る爲め四月より不經濟線である上田原青木間の電車を廢止し更に上田上田原間の複線を單線に改めざる事に決定同時に二万圓の豫算で自動車五台を購入上田青木間の運轉回数を増加する事に決定した。

更生村に助成金交付 本縣農村經濟更生特別助成村に對する昭和十二、三兩年度の國庫補助金は縣下十一ヶ村に對し合計十四万二千八百圓交付する旨の指令があり縣經濟部では二月五日に各村に割當てたが上小關係は川邊村一万一千圓である。然して東信地方が此の大半を占めるは如何に同地方が經濟更生に熱心なるかを物語るものである。尙有助成金を以て各村は副業の増産を計るとか各種の共同施設を行ふもので更生上に相當役立つものとして期待されてゐる。

上田スキー俱樂部スキー講習會 上田スキー俱樂部は本年第一回の講習會を二月五日、六兩日營平で行つたが講師は馬場忠三郎、今井輝雄、茅野功、荻原真雄の諸氏である。

國防思想普及及戰利品展覽會 上田軍友會主催の國防思想普及及戰利品展覽會は二月四日より十三日迄市公會堂に開催同展出品の千余點は何れも我陸海軍不出の寶物許りて地方に於ては再び觀る事の出来ない大規模のもので觀る者事變の生々しい姿に何れも感激の涙を絞り毎日押すなりの盛況で頗る好評を博してゐる。

新コース申請 鹿澤スキークラブ小諸スキー協會上田温電合同して次シーズンから上信國境の日の丸コースを鐵道省の割引コースとして申請すべく二月八日コース踏査を行ひ完全な指導標を設けする事になつた。

軍人六名を出し銀盃を賜る 賞勵局で

は今回三人以上軍人を出した家庭を表彰し縣下では五百三十四戸に達し上田市では成澤定重氏が六名を出し銀盃一個を下賜された。

染織試験場内に撚絲工場設置 縣では本年申北信に共同撚絲作業場を新設すべく商工省より試験擴充費の交付を受け上田市を選定したが右に關し上田織物同業組合では二月十三日總會を開き協議の結果作業場新設の場合は敷地建物等に六千圓を以て縣の補助を受けても機械設備費等相當かゝり少くとも二万圓近く要するので之に對する地元負擔は時節柄極めて困難なため染織試験場内の機械工場の一部を借り受けるべく同試験場並縣へ陳情する事になつたが今度廣幅物及輸出向其他近代織物は何れも撚絲を要するので北信地方の同業者に呼びかけ右作業場の實現に邁進する事になつた。

養刈大將講演 前關東軍司令官養刈大將は二月十五日午後〇時五十分上田驛着列車で來田、二時半より市公會堂に於ける國防婦人會支部發會式に臨み引續き「時局に對する所感」の題下に講演され更に夜は七時から同様講演された。

神宮スキー大會 第九回明治神宮体育大會スキー競技會は二月十七日から四日間下高井郡豊郷村野澤温泉で開催され出場者は全國廿三豫選區より抜きの二百六十七人(男子部)に所屬十五チーム七十一人(女子部)である。尙此の種目別は長距離百十九名、飛躍七十一名、複合五十八名、繼走十六組、滑降百廿二名、廻轉百三十二名、新複合百六十六名(男子)、滑降、廻轉、新複合各六十三名(女子)である。女子部と同様オープンレースである軍隊競技の出場は二組式であつた。本縣の出場は十二名である。

上田市助役に木内權四郎氏決定 巖に辭職せる柴崎助役の後任は二月廿五日の市會協議會に於て大村知事推薦に依る木

内權四郎氏に決定した。同氏は南佐久郡岸野村出身今年五十歳苦學力行して専檢と高文の豫備試験をパスして居り大正五年上高井郡書記、南佐久郡書記を経て縣廳に入り文書課主席から地方課農務課を歴任して昭和八年十二月商工水産課主事となつて現在に及んだ地方行政に精通せる事務家のエキスパートである。

防空演習 二月廿三日より廿六日迄防空演習が行はれた。今回の演習は燈火管制は行はず通信連絡に重點を置いたものであつた。

熊谷校學生引上げ 熊谷飛行學校上田分校學生は練習訓練を終了し二月廿六日全員本校へ轉じ更に二ヶ月の實地訓練をうける事になつたので成澤市長、廣瀬收入役等は廿五日同校内に送別茶話會を開いた。新學生は近日來田する筈である。

新鹿澤スキー大會 新鹿澤スキー場では二月廿七日スキー大會を行つた。豫算原案は歳入四十七万八千五百七十六圓、歳出は臨時部十三万五千八百八圓、經常部三十四万三千四百六十八圓で前年當初に比し一萬四千九百九十六圓増である。膨脹の主なるものは二割の物價騰貴に依り經常費の増額、水道ポンプ購入費八千圓、縣道上田松本線寄附金九千六百圓等で特別税戸數制は一戸當廿一圓九十錢、前年十七圓八十錢七厘に比し二割二分六厘増である。然して二月廿八日の市會に於て歳出七千八百圓を削減、歳入六千四百二十二圓の増収とし計一萬三千二百六十六圓を戸數割輕減に振り向ける事となつた結果一戸當二十圓二十錢、一割三分二厘の増徴に輕減された。

防空市指定 上田市は防空都市として指定され強制施設が行はれることになつた。

製絲一金の能率 縣製絲課では縣下の營業輸出製絲、同國用製絲、産業組合製

絲の三種に分ち一年一釜當りの總絲量を調査中の處今漸く完成したが右に依ると營業製絲は六四貫五五六、同國用製絲は五〇貫〇二二、組合製絲四六貫五一五で輸出製絲が斷然第一位を占めてゐる。又從業女工の能率を物語る一日の總絲量は輸出製絲二二七、國用製絲一九五、組合製絲二〇七を示し生繭百目に對する生絲量は輸出製絲一二五二七、國用製絲一二五二五、組合製絲一二五五六である。尙一ヶ年に於ける作業日數は輸出製絲二八五日、國用製絲二五六日、組合製絲二二五日の平均になつてゐる。

神戶大丸の信州特産展出品 本縣機織聯合會主催の信州特産品宣傳大會は三月十五日より二十日迄神戶市三宮大丸神戶支店に開催されるが上田織物組合の出品は縮緬五反、平絹三疋、上田縮三反、白紬二反、白絹紬二反、絹國旗二十枚、帛紗十枚、沓下二打、ハンケチ二十枚等である。

ハイキングの簡易宿泊所設置 鐵道省では早くもハイキングシーズンに備へ、今年には非常時の折柄「颯爽とハイキング」の標語の下に体位向上後後の備へと銘打つて旅客誘致策に乘出し本年はハイキングコースの重要個所に百名内外の團體を收容出来る簡易宿泊所の設置に万全を期する事になり、上田温電へもこの旨通知して來たので同社では調査の結果川西方面では別所温泉の倉澤運平氏の蠶室を有信莊と改名(六十名收容)、上信國境では菅平は山の家(百名)、新鹿澤はハイキングの家(百名)の三ヶ所を申請した。何れも宿泊料一人四十五錢内外である。

上田袖復活 小縣郡川邊村では模範的更生施設として機織工場と製麵工場の建設起工式をこの程行つたが總工費二千五百八十圓でこの内機織は蘭毛羽を利用して上田袖を生産振興を計らんとするものである。







本會記事

本會日誌

二月八日 松尾順策氏(絲四)逝去せらるる電報にて弔慰を表す。原富岡製絲場火災に付見舞狀發送す。二月十四日 時報發行日(二月廿四日)に變更届提出す。二月十九日 滿支産業調査會幹事會を開き講演會、座談會、講師の件決定す。二月廿一日 昭和十二年度會費未納者に對し至急納入方依頼狀發送す。二月廿四日 手塚達郎氏(蠶廿一)戦死の記事を見る。即時針探會長、蒲生理事長外宅を訪問弔意を表す。上田市在住の應召會員家庭慰問す。二月廿五日 理事、參事會合金子先生卒去に對する弔慰方法に關し協議す。二月廿六日 金子先生卒去の通知全會員に發送す。二月廿八日 金子先生の告別式に參列す。田口技師に依頼滿支産業に關する講演會及座談會開催す。二月廿九日 富士盛氏(絲廿四)逝去せらる。電報にて弔意を表す。三月四日 新入會員歡迎會開催通知發送す。原富岡製絲所よりの禮狀 前略本月五日夜當所出火の節は早速御懇篤なる御見舞を辱し御芳情難有奉深謝候、御座を以て小部分の焼失に止まり損害も輕微に有之候間乍他事御休心被下度候、先は不取敢書中を以て御厚禮芳々御挨拶申上度如斯に御座候。 敬具 昭和十三年二月 群馬縣富岡町 原富岡製絲所 千曲會御中

支那事變應召者に就て御願ひ

本紙會員動靜欄へ登載以外に應召會員御承知の方は左記事項至急本會迄御一報の程御願ひ致します。尚今後應召された場合は御家族は勿論會員にして御存じの方は速かに御通知下さる様御願ひ致します。彙に御速報又は御調査下されし各支會並に御通報賜はりし各位に對し本紙上を以て厚く御禮申上げます。

一、應召者氏名 二、家族の現住所及氏名(留守中通信先)

出征會員慰問資金募集

南北支の第一線に活躍せらるる吾同胞勇士も百有餘名なりました陣中に於ける各位の勞苦に想ひを致す時は實に感謝の至りに堪へません。本紙十二月號代議員會議事録並に同封の趣意書御高覽の上奮つて御献金賜はらんことを御願ひ致します。 上田蠶絲専門學校同窓會統後會

蠶絲學雜誌の爲に

蠶絲學雜誌は年四回の發行になつたので從來に比し頻繁に發行せねばならないから發行期日の整理の爲今回第十卷三號と四號を合本にした。就ては豫め御惠稿の著者諸兄に御諒承を願ひたい。只今編輯中で四月には發行する豫定で進めてゐる。續いて十一卷一號の編輯も初め様さしてゐるから諸兄の遠慮なき御寄稿を待望歡迎する。昨年からは經營者も變り讀者層も廣範圍に亘つたわけであるし、今後愈々千曲會編輯の權威ある雜誌として從來にも増して此の蠶絲學雜誌に對して新しい認識をして頂きたい。尚又千曲會の權威の爲にも諸兄の愛讀により立派に生長を續けける様に只管に御後援を願ふ次第である。 三月八日 蠶絲學雜誌編輯係

支會役員の異動

神奈川千曲會に於て役員左の通り異動せり。

- 支會長 新任 小笠原振一 副支會長 同 梅澤萬次郎 支會長 退任 水野 健吉 副支會長 同 西山 謙治

向上資金御寄附

本會向上資金中へ左記の通り御寄附せらる。洵に感謝に堪へず。御厚志に對し本紙上を以て御禮申上ぐる次第なり。

- 一金五圓也 横澤 正雄氏 一金七圓也 市村志眞衛氏 一金拾圓也 村田 一由氏 一金七圓也 平尾 孝平氏 一金七圓也 淺川 茂樹氏

滿支蠶絲業講演會

千曲會内滿支産業調査會は豫告の如く左記により母校の便宜も得て第一回講演會を開催した。

日時 二月二十八日(月)午後一時より 場所 母校千曲會館樓上 演題 鮮滿支蠶絲業概観 講師 農林技師 田口敏夫氏 先づ校長先生(本調査會々長)より開會の挨拶あり。直ちに田口氏の講演に移る講演内容は主として鮮滿支の蠶絲業に關するもので氏の該博な識見に加ふるに、最近同地方を詳細視察調査せられた豊富な材料を以て盛られ、又時局柄の微妙な問題にも觸れ益する所誠に尠なからざるものがあつた。尙學生の出席も相當に多かつたので校長先生の御依頼で特別講義の意味でその道の權威者である氏に絲價安定施設法の基礎的概念を詳細に解説して頂けたことは之又意義多いことであつた。

講演は三時間亘つたが最後に本會幹事長の挨拶あつて閉會とす。同會出席者は學生男女共約一〇〇名、同窓生、職員四十餘名で盛會であつた。 一般講演後別室に於て研究座談會に移り、又産業調査會今後の實行計畫に就き協議し左の通り決定した。

一、既に交渉を進めつゝある企畫院次

長青木氏を四月中旬頃に母校に招聘し講演を依頼する事。尙右の交渉は再び校長先生に御配慮願ふこと。

二、本會は可及的速に滿支に産業調査員を派遣すべく計畫を促進する事。尙派遣の時期、方法及經費等に就ては理事會に於て時局に鑑み最も適切手段を講ずる様研究實行する事。

右の協議を遂げ六時過ぎ散會す。 會後講師の歡迎感勞の爲め有志により心ばかりの晩餐會を開催した。

終に講師田口技師の御懇情並に校長先生の御高配に對し又本會の爲遠近より御參會下さつた千曲會員諸兄の御熱意に對し深甚なる謝意を表する次第である。 因に校外の同窓生にして本會に出席せられたる諸氏は左の通りである。

- 佐藤良太郎 久保田正樹 八木 誠政 齊藤 菊雄 山本岩三郎 浦山 藤吉 中島 茂司 永田 平 小宮山太助 金崎 眞英 母袋 良平 藤本衛佐雄 笠原 正巳 諸兄 他に田口敏夫氏及校長先生 (滿支産業調査會幹事記)

淺治架裝男氏戦傷癒えて再び戦線へ

十月廿一日西保障村の戦闘にて戦傷せられたる淺治架裝男氏(紡十三)は入院一ヶ月にて全快し昨今再度前線に奮闘してゐると十二月十四日附校長宛通信があつた。(詳細は慰問袋に對する禮狀の項参照)

本校出身王俊峯氏の活躍

中支に出征中の小山清氏の通信にて本校出身の支那人が吳興縣治安維持會に居ると云ふ事を聞き訪ねたる所蠶十七回卒業後王俊峯氏(王福山氏の事ならん)と云ひ委員長秘書を勤め母校の事を終日快談して別れたとの事であつた。同氏は事變迄南京の農事試驗場に勤務せるも事變の爲め追れて當地に來り治安維持會に勤務せ

るのであると云ふ。通信する宛名は宣撫班湖州宣撫班内佐藤誠氣付王俊峯である。詳細は戰場便り小山清氏の記事参照せられたし。

本校出身詳文周氏の事

二月八日の朝日新聞に芝罘にて竹村特派員發として本校出身詳文周氏の記事が出てゐたから左に轉載する。 我が陸戦隊が去る三日芝罘港開平碼頭から上陸市内に殺到した時可愛い二人のオカッパがとある家の窓から首を出し、「日本兵隊サンペンザイ」と突然鮮かな日本語で叫んだ。上田市生れ半田清子さん(二八)の長女裕子ちゃん(九才)と二女和子ちゃん(五才)である。二人のお父さん詳文周君(三一)は十年前上田蠶絲専門學校に留學中清子さんと結婚した。 今度の事變で詳君は勦先の公安局へも出る事が出来なくなり親子四人は抗日の嵐の中で日本着物を焼き子供達も日本のお人形迄焼き捨て姿を變へ居所を轉々として或る時は地下室にもぐり三日間も飯も喰はず「皇軍は心す芝罘に來る」との希望をしつつかと抱き乍ら五ヶ月間続後の危険を耐へ忍んで來たのであつた。裕子ちゃんの水兵さん達に抱かれ乍ら可愛い、聲で万歳々々を叫び續けた。水兵達もホロリとした。

以上が東朝に掲載されてゐた記事の全文である。半田清子さんの實家は上田市緑町で現在母親だけのさん(五四)は常盤館と云ふ旅館兼下宿業を營んでゐる。清子さんは男二人女六人兄妹の二番目で十年前同家に下宿して上田蠶絲専門學校へ通つてゐた支那留學生の詳氏と國境を越へて結ばれ芝罘へ渡つたもので實家への便りは一年半程前にあつたきりで實家では本紙上で始めて清子さん親子の無事な事を知つたのであつた。同氏は現在宣撫班として活躍せられてゐると云ふ。



會費領收 (三月五日)

昭昭十二年度會費金四圓也
飯塚安治(蠶七) 小林辰夫(蠶七)
平尾孝平(蠶七) 傳田靜夫(蠶七)
荒木 喬(蠶七) 青木 深(蠶七)
三好彌市(蠶八) 竹内健二(蠶十)
南林孝三(蠶七) 黒岩京次郎(蠶九)
小井士英二(蠶七) 三宅農富榮(蠶七)
和田幸一(蠶七) 高橋 英(蠶七)
未納會費金四圓也
入會金納入者 戸塚 一(蠶七)
金五圓也 猪原良芳(蠶七)
星野 莊次(蠶七) 齋藤猪之作(蠶七)
向井孫市(蠶七) 齋藤猪之作(蠶七)

統後資金寄附者 第三回

(四月五日現在)
金貳圓也 市川信一、白澤 幹
小宮山太助、齋藤菊雄、永田 平
笠原 正巳、細川 三郎、小見 益男
金壹圓五拾錢也 曾山直高
金壹圓也 金兒 文夫、工藤 見吉
櫻林幸雄、吉村眞作、前澤 康雄
鈴木 俊夫、西本朝平、福地 進
荒木 喬、六川忠一郎、渡邊 雪雄
奥村忠治、江口嘉清、山崎 雪雄
高橋 眞澄、福本貞雄、湯原 諄
藤本衛佐雄、平尾孝平、松村 惠一
北條五郎右衛門、小柳しづ、川上 三
高島 一郎、原田 仇、宮島 靜三
井上 スイ、白井 和子、伊藤 幸枝
木下とみゑ、安部 和
右小計金四拾八圓五拾錢也
累計金六百拾參圓五拾錢也

叙任辭令

母校之部
二月十六日 鷹野 誠一
任上田縣絲絲專門學校助教授
給六級俸
二月二十四日
敍正五位 金子 英雄
四級俸下賜 金子 英雄
舊職員之部
正五位勳六等 春日井新一郎
敍勳五等授瑞寶章(二月四日)
卒業生之部
公立實業學校教諭 古東 幹太
陞シテ高等官五等ヲ以テ待遇セラル
(二月一日)

支會通信

静岡支會通信

從五位 上野 榮仁
敍勳六等授瑞寶章(二月四日)
九級俸下賜(一月十三日) 田浦 準
從六位 正七位 金兒 文夫
從七位 寺島 親雄
從七位(以上二月一日) 橋本 博
從六位 伊藤 勢龜
同 宮入 誠一
同 大塚 重藏
同 古東 幹太
同 小笠原 振一
彼從位(以上二月十五日)

静岡支會通信
正 一郎
聖戰半歲、皇威八紘に輝く新春が訪れ、
愈支那事變も長期戦に移る事に決つた。
戦争遂行の爲に、最も重要な役割をつと
むるものは、統制のとれた組織の力であ
ると云ふ事に、何人も今更存はない管
である。古今の歴史を繰りに、組織の纏
つた力の強弱が、よく一國の榮枯盛衰に
影響した例は枚擧に遑なく、學校にして
からが、その同窓生の團結力の如何に、
その校の運命を左右する事例も亦尠くな
い事は、改つて喋々する要はないのであ
る。
されば、千曲會静岡支會は、茲事變下に
第三回總會を開き、會の統制と相互の親
睦を彌が上にも強化せんと、事變の進展
をジツト特機の姿勢で見守つて居たの
であるが、恰も好し、首都南京は陥落し
機將に絶好と、會長針塚校長先生の御來
駕を懇請したる處、御多忙にも拘はらず
幸ひお開席を得て、吾等は欣喜期日の陸
月三十日を今や遅しと待ち焦れた。そし
てやがて其の日の午さがり、春雨烟る靜
岡驛頭に、いつも變らぬ饒樂たる恩師を
ばお迎ひする事が出来た。
先生には、お願ひの間もあらせられず、

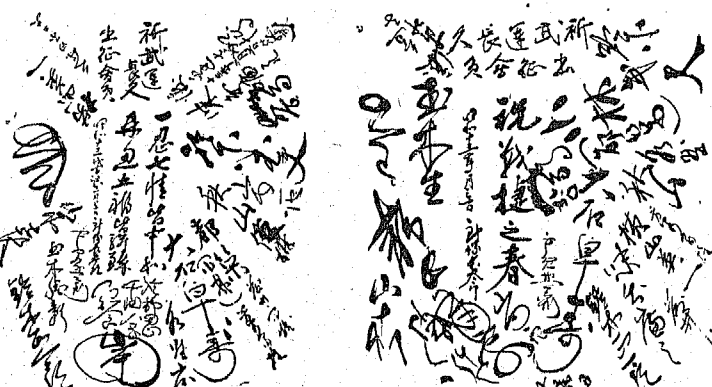
國幣小社淺間神社に出征將兵の武運長久
を祈願せられ、直ちに會場にお見えにな
つた。
午後三時開會、事變色豊かな議事日程も激
みなく進行、校長先生の温情溢るゝ御訓
話を拜聴した後、愈々樂しき大饗宴とな
る。恰も時は、皇國が世界一轉機を劃し
た記念すべき戦捷の春、我が支會として
も三十五名の支會員中、相前後して、宮
崎弘、倉元隆太、池田俊郎の三君をば、
光榮ある應召者として、出師の軍に歡送
した名譽の正月である。
處は萬古不滅の白雪を頂き、突屹萬丈、
鐵峰富嶽の下、駿府は佐之春樓、旭日輝
く東海道屈指の料亭である事を披露して
置く。
メンバーは恩師會長針塚校長先生を主賓
の二十一名なり。(順序不同)
玉木 勝彰、大石 卓爾、戸倉 惣兵衛
都筑 禮三、岸 勝彌、味知 廉三
大高 雄三、横山 英一、水野 廣
藤谷 正男、木田 元、秋山 俊雄
藤井 宗雄、渡邊 嘉博、鈴木 正一郎
山本 七郎、久保田 不夫、鈴木 武雄
山内 一、芳谷 富雄、植村 滿義
I がお八人もある元老あり。校長先生に
二十年振り、老眼懐舊の水も潤へる
大人あり。鼻下に鬚ある怖しきうな小父
さんやら、デッブリ太つて重役らしいO.
Bやら、花薔しい紅顔やら、さては、後
六十何時間とかで、獨り悦に入つてあ
る御人あり。聞くに人生最大の祝典も、
も早時間の問題とかで、千秋の思ひもさ
る事乍ら、萬障御集合せ御出席と自ら曰
ふハリキリ方なり。又は紅い梅のお吉の
港から、他家用を飛ばせて、待つた新人
等々々。出席率、六六%、遺憾乍ら、
一〇〇%には一寸足らぬが、マア成績は
上々と云ふもの、以上實に、時、處、人
三拍子揃へて一流づくめの豪華版とも稱
すべきである。

一致、第一盃を、出征會員の勞苦を謝し
併せて健闘を祝福する乾杯に始まる。
酒宴の嬉しく楽しい状況は言ふだけの如
く、この一堂に會せし人々は、年に遠近の差
こそあれ、その昔は皆、松尾城下に笈を
負ひ、不易の校是に培れた縦横の連誼で
ある。宜しく恩師を圍んでの和やかな水天
らすの團圓こそ快又快。庭前の梅花も、
一二輪、微笑を含んで、羨んで居た。
美妓の踊りも静岡勝太郎の咽喉も見むか
ばこそ聞かばこそ。如きん連中は、只お
畑番にして置く始末である。
恒例により酔餘の寄書を爲す時分にはか
なり酒席もはづんだ頃だつた。又酒戰酣
なる時、今日の喜びを出征會員に如實に
傳へんが爲に、寫し繪をモノせんと、評
判の腕のよい友人を呼んだが、この記念
撮影は、寫眞屋餘りにお歴々のオンパレ
ードに上氣して、失敗し申譯無いと謝り
に來たのは翌日の事。餘分乍ら、附記し
て置く。

酒杯の應酬、勳襟を開いての歡談盡くる
處を知らず。皆思出懐しき上田時代の純
な氣持に浸り乍ら、春宵一刻を樂しむ。
豫算超過は、いつの間にか。幹部特別會
計を的にして、大船に乗つた様な平然た
る顔。
かくして、アルコールは陸續と、運ばれ
たが、片端から整理して行く腕のよき。
最後までノビたもの無し。
時計が九時を打つた後、聖壽の萬歳と校
運の隆盛を壽ぎ、大聲に萬歳三唱、名残
惜しくも長夜の宴を閉ぢた。
そして、皆は再會を期しつゝ、三三、伍
伍八方に散つた。
静岡支會記念すべき事變下總會の一席、
お粗末ながら之れに止むる次第なり。
(二、五稿)

千曲岐阜支會 通常總會の狀況

二月十九日本支會通常總會を岐阜市櫻川
樓に於て開催す。當日は稀れに見る大雪
なれども新任の田浦準兄偶然來岐せる前
支會長上原清夫兄の飛入あり華陽一流の
美妓を加へ會員の意氣愈々高し。定刻參
する者十二名午後六時より深更に到るも
歓談快談つき十二時散會す。當日決議
せる事項左の如し。
一、役員補欠選舉の結果左の諸氏新任
支會長 田浦 準
代議員 間宮 成吉
幹事 中尾 七郎
一、支會員の應召出征者に對し寄書を贈
り士氣を鼓舞すること(當夜作成)
一、支會基本金の徵集は正副會長に一任
すること
當日出席者左の如し。



上原 清夫、田浦 準、湯澤 重敬
宮川 繁治、三輪 貞徳、中尾 七郎
久保田 松藏、篠田 正信、田玉 實
池田 爲雄、井口 澄男、松井 憲二
那岐 隆吉
日六十月九年五〇九







計報

御逝去通知

本會々員 松尾順策氏(絲四) 片倉製絲紡績株式會社在勤の同氏は病氣(十二指腸)の爲め二月一日入院せられ專ら療養中の處黃疸病を併發同月八日遂に逝去せらる。謹みて哀悼の意を表す。御遺族は新潟縣南蒲原郡田上村御令弟松尾清氏である。

手塚達郎氏戦死

遠山部隊に屬し北支に於て御奮闘中の手塚達郎氏(蠶廿一)は十一月十四日(十四日)に京漢線其縣西方洗馬湖黃山村附近の追撃戦に於て名譽の戦死を遂げらる。行年二十六才、謹みて敬申の意を表す。同氏は上田市鎌原町手塚初十郎氏の五男で上田中學を経て母校蠶絲科卒業後愛知縣布袋町愛知縣蠶絲試驗場に勤務し次で甲種合格して入營し歩兵伍長となり退營後母校蠶絲科生理學教室に勤務中應召出陣し一度は戦傷せられたるも癒えて第一線に活躍せられたる。あつたもので御遺族は父初十郎氏の外長男太郎氏妻千代子氏に二男、二男清見氏妻ますみさんに二男清見氏、二女清江さんがあり二男清見氏も應召重兵上等兵として目下〇〇に勤務中と云ふ兄弟揃つて出征した名譽の家庭である。

御逝去通知

本會々員 富士 巖氏(絲廿四) 昨年三月卒業自營中の同氏は病氣の爲め専ら療養中の處養生相叶はず二月二十四日遂に逝去せらる。謹みて哀悼の意を表す。御遺族は山形縣西置賜郡十王村二六二六御尊父富士権作氏である。

弔慰金募集

故飯田喜雄氏(紡十四) 故松尾順策氏(蠶十九) 故手塚達郎氏(蠶廿一) 故富士 巖氏(絲廿四) 右五氏に對し弔慰金募集致します 故飯田氏は三月末日、故松尾氏は四月末日、故手塚氏は五月末日迄に取組め御遺族へ贈呈致しと思ひます。夫れに間に合ふ様振替口座東京四三三四一番へ夫々故人に對する弔慰金の旨御記入の上御拂込下さい。 昭和十三年三月 曲會

故松尾順策氏の遺族よりの禮狀

謹啓亡兄順策君の節は御多忙中にも不拘慮々御會葬被下御鄭重なる御弔問を辱うし且靈前に御厚志を賜はり難有奉深謝候。先は不取敢旨略儀以書中御挨拶申上候。 昭和十三年二月八日 新潟縣南蒲原郡田上村 弟 松尾 清 千曲會御中

弔慰金報告

- 故増田孝氏弔慰金第三回 濱井壽夫 永田 平、猪瀬親二 金貳圓也 右小計金四圓也 故村田孝男氏弔慰金第二回 宮城 博 金壹圓也 故神原敏男氏弔慰金第二回 岡野 巖 金貳圓也 岡野 卓郎、茅野 功 塚田 昭男、濱村 一彦 金壹圓也 平尾孝平、濱村 一彦 金五拾錢也 岩下龍哉 右小計金拾四圓五拾錢也 故飯田喜雄氏弔慰金第二回 小見益男 金壹圓也 故松尾順策氏弔慰金第一回 有賀文雄、三輪 輔、小岩井桂三 有賀康介、佐藤金六、竹内健二 小林啓介、倉澤源太郎、三谷 勝 瀧澤啓四郎 右金貳拾圓也

松尾順策君の死

製絲科第四回の卒業生松尾順策君は去る二月六日午前十一時五十分東京市世田ヶ谷區北澤二ノ二〇二原病院の二階五號室で五十一歳を最期として逝きました。彼とは在學當時は勿論、卒業後も何かと往來があり、逝ける際にも所謂死水を取つた深い因縁があつた關係上、彼の死を悲しむ惜まれてゐる同級の諸君並に同窓の友人各位に、彼が死んだ前後の模様を御知らせしたり、今更遷らぬ私の泣言を申し上げたいと思ひます。

御承知のことと思ふが彼は大分縣の豊中製絲株式會社を最後として蠶絲業界を去り、別府市で數年間八百屋を経営してゐたのを憶ひ昭和七年十月、私が引張りで出た片倉製絲紡績株式會社に入社、最初本社社務となり、翌八月には全社大宮研究所に轉じ、其の九月には事務主任となり、その後事情があつて九年七月から再び本社に戻り、工場課に勤務してゐた。彼は學生時代から呼吸器の疾患を怖れ非常に警戒してゐたが近年胃腸が悪く兎角生氣を失つてゐた。この一月三十日の日曜日には社の當直を勤め、翌三十一日出勤した時は如何にも顔色が悪いので同輩の忠告を受けて早退し、二月一日青山高樹町の赤十字病院第三内科で内藤博士の診察を受け、レントゲン検査の結果懸念してゐた呼吸器病でなく、十二指腸であることが判り、十二指腸は以前にも一度潰瘍を経験しあり、寧ろ安心し簡単に治るものと考へてゐたのであつた。同病院は戦傷病兵で満員の爲め全博士の紹介で前記の原病院に入院したのであるが、病院へは片倉の社員であることも言はず、片倉へも通知せず、當時止宿してゐた青山高樹町十二の青山ハウス主人の語では三、四日で退院すると言つてゐた。このことに片倉では病氣見舞の花もこのアパートへ届けられたやうな始末であつた。然るに五日午後三時過病院からアパートへ松尾君重態なれば近親に通知して呉れとの速達があつた旨同家から片倉へ電話があり、同社では事の餘りに意外なことに驚き、近親に速報すると共に社員を病院へ走らせる等騒ぎの真最中に偶然にも私が同社を訪問したので直に病院へ駆け付けた次第である。時は午後五時少し前彼は既に意識を失ひ、眼は見えず、彼の名を呼んでみたが何の應へもなく、時々夢中で体を曲げ、脚を動かし、苦しんでゐた。附添への看護婦の談に依れば、驅虫劑を二回與へたが、昨夜は非常に苦しむ姿から二度も落ちたやうな状態であつた。今日の正午頃から意識を失つてゐるのだとの事であつた。然しカンフル注射の影響が容色は左程悪くなく、急變は今朝の事との事には一夜一旦歸宅したが、翌朝危篤に陥つたとの電話に駆け付けたが、彼は引續き意識不明の儘一言も話さず遂に逝つてしまつた。

その朝電報に依り故郷越後から彼の弟妹、親類の人々が來着され、萬事は片倉の世話を、遺骸は同地下北澤三ノ九三八永昌寺出殯所(禪宗、彼は禪宗であつた)へ移し、納棺して通夜し、翌七日は友引だつたのと朝鮮に在住の次弟清氏の到着を待つ爲め一日を置き、翌八日同所での午後三時四時の間告別式を営み、五時半頃茶肆に附し、近親の方々夕食を共にし、遺骨と別れて歸宅したのは夜の八時過ぎであつた。而して遺骨は翌日弟妹達に懐かれて故山へ歸つて行きました。憶へば彼と私は實に不思議な因縁に結ばれてゐました。共に地方の農學校を出て、慘々世の中の苦勞を経験した揚句、相當な年輩になつて、彼は二十七歳、私は二十五歳の春上田の製絲科に入り、互に好敵手として終始一、二番を争つて學校を卒へたものでした。其の後彼は恵まれた田舎の工場廻り、私は幸か不幸か派手な海外生活だつたので、彼が豊中製絲に在勤中別府の温泉で半日一晩遊んだの日本會社機曾に恵まなかつた。昭和五年に本會社に落付くこととなり、彼が言はる蠶絲業界に愛想を盡かし、別府で八百屋を営んでゐると聞き、彼の如き人材を八ひ、極力その秀才を推賞し、動かぬ彼を強いて引張りに出して片倉に入れたのでした。入社以來日淺いにも拘らず最近はその腕と秀れた人格が認められ、漸く擡頭せんとする秋に當り忽然として逝つた事は如何にも残念であり遺憾に堪へない。

彼は十九歳の春郷里加茂の縣立農林學校を卒業し、直に東京に出て、一時は新聞官などとして苦學し、徴兵検査に合格し病氣の爲め一ヶ年の在營で、歩兵一等卒として歸休兵となり、其の後大阪市へ出て職工學校の書記やら、体操の先生やらを勤め、蓄めた僅かな資金を持つて上田へ入つて來たものである。卒業後製絲工場へ務めたが、御承知の如く彼を活動せしむべく餘りにも惨めな現實であつたが爲め、彼をしてスツカリ失望せしめ且又健康をも害せしめ、四十を越してから八百屋に轉業せしめる結果となつたのである。片倉へ復たした頃は往年の朝氣無く、兎角退屈の極になつてゐた。更に彼の家庭生活が又極めて惨めなものであつた。彼は過去の或深刻な經驗と健康を懸念して學生時代から無妻主義を主張し久しく獨身生活に徹してゐた。それが如何なる

心算の變化か、別府で八百屋を開業する際誰か彼が四十二歳の時と思ふが、豊中製絲在勤當時使つてゐた事務員の稲田光代と結婚したのであるが、眞の所謂スピンホームの味を知らず、昨年夏九ヶ年の家庭生活上に破綻を起し、それれも或事情から私が間に介在せねばならぬ結果となつたのであるが、結局彼に物質的に又精神的に甚大な打撃を齎して、離別することとなり、昨秋から前記のアパートへ移り、又獨身生活に復つてしまつたのである。思へば彼の一生は苦勞の連続であり、彼の生涯は實に惨めな、淋しいものであつた。どう考へても可愛想てたまらなない。

今一つ私が残念で耐らないのは、病氣しと聞き駆け付けた時彼は既に意識を失ひ松尾君僕だよと叫んでも應へなく、彼の最後の言葉も聞いてやれなかつたことである。殊に彼の死に一脈の疑點を懐いた私としては一層その憾が深いのである。彼は絶へて行かなかつた故郷へ、この一月には歸つて墓參し又近親を訪ねてゐるに違ふ、それに入院の直前一月三十日には離婚した、恨みとある管の彼女にある品を贈つてゐるのである。そして入院して重態に陥る前、看護婦に自分は三界孤獨の浪人であるから如何なる容態となつても一切通知して呉れる必要はないとのみ話し、勸告の片倉の名さへも知らなかつたこと云ふ點から、死の憾があつたのが或は覺悟の死ではなかつたかと疑はれるのである。又十二指腸で一月三十一日迄出勤勤務してゐた彼が僅か六日後の五日に危篤に陥り、而も死の數刻前から俄に顔色が黄くなり、急性黃疸の徴候に變じた點から、これは専門家の意見を聞いたのであるが、或は十二指腸に對する驅蟲劑が彼の体には過量であつたが爲めではないかと想像されるのである。何れにせよ私には彼が不治の病の爲めに逝つたものとはどうしても諦められない。然し、これも彼の運命であつたのかも知れぬ。そう諦めるより外ない。唯彼の生涯を追想すると、あの惨めな、淋しかつた、彼の一生が可愛想で耐らない。今の私には他界に於ける彼の冥福を祈ると云ふより、残念だ可愛想だつたと云ふ切實な現實で一杯である。未だ述べたいことは澤山あるが今はこの位で擱筆する。同級の諸君、同窓の友人各位どうか彼の爲めに泣いてやつて呉れ、祈つてやつて呉れ給へ。



嗚呼松尾順策君

見波 忍

二月八日の朝君の死を傳へる一通の端書が配達された。平素正しい生活をして居た君が遂に逝かれたのだ。大正六年卒業以來有爲の才能を充分持ちながら多く恵まれぬ過去であつたが最近片倉へ就職せられてから、漸く良い働き場所を得られたと喜んで居たのに全く惜しい事をしたものだ。君は不言実行の士で常に相當の地位に居ながら万一君の意志に背する様な事があると何時も勇ましく要職を去つて致す事になつたが全く君の人物の偉大なりしを今更思はれるのである。記憶のまゝ君が平生を追想してみよう。

戸倉温泉

君は優秀な成績で學校を出られると直ちに本庄の橋本へ就職せられた。同社は横濱の生絲問屋小野面店の經營であつたので資金の備はなかつた様だつたが工場長として工場を支配して居られた君の技術的方面の事にまで干渉をされ所謂理想的工場經營と云ふ夢を抱いて居られた君の自信を傷けられたとも思はれたのか大正八年の春には既に同社を辭めて戸倉温泉の笹屋ホテルに悠々と静養して居られた。丁度私も二三日同宿して卒業以來五年振りの懷舊談を炬燵でやつたが若い人達が兎角自分の力を信じて居るので實社會へ出てから裏切られる事が多いとつくづく感じて居られた様子があつた。其後私は君を九州都城の北諸縣郡製絲株式會社の現業長として推薦し君も承諾されたのであつたがどう云ふ都合か急に伊那社の技師長に就任する事になつたから誠に申譯無いとの手紙を貰つた。當時伊那社は創立當初でもあり君の如き手腕家を要望して居つた時代であつたら私も双手を擧げて君を送つた。

入院中も努力

君は行くとして可ならざる處なき八面玲瓏の人であつたので伊那社技師長より兵庫縣濱坂の神國製絲株式會社の支配人として就職せられた。多分學校よりの拔擢であつたと思ふがあの未曾有の大震災の損失で當時の製絲界は全く眼も充てられぬ窮狀であつたので製絲業の大勢には抗し難く同社も大阪の素封家金澤一家の經營下にあつたが休業するの止むなきに

至り君は東奔西走された甲斐もなく閉業の憂目に遭はれたのであつた。心痛のあまりか病を得られ入院せられ入院中も病魔をおし幾度となく金澤氏を訪問せられ職工賃金の支拂金充當の資金と若干の退職手當金をと調達せられた様であつた。丁度私が神戸の安田銀行に勤めて居つた頃であつたので種々と相談相手になつてやつたが君は資本家の製絲工場經營と云ふ事については餘り好感を持つて居られなかつた様だつた。工場法の適用のなかつたあの頃の製絲工場は退職手當金はおろか工賃の不拂等は常に事であつたので敢然と君は正義の道德を金澤氏に説かれた。その結果君も程なく同社を退社され桐生の絹商會に轉勤せられた。

別府温泉

君は家庭上の不和が原因であつた故か交際も少く三十七八才まで獨身生活を送られ一面淋しそつてもあつたので進んで家庭を持たるゝ様すゝめたのが動機となつたかどうかは判然しないが獨身論は曲げられた様であつた。日本絹商會は毎日數人の試験工を助手に生絲の検査を朝から晩までやつて居られ仕事も平凡で單純であつた故か矢張りどこかの製絲工場へでも就職せたいと云ふ希望が頗るあつたので學校當局とも了解を得て九州津の豊中製絲株式會社工場長に御世話した。九州は氣候もよし別府の温泉も近しい(本人は非常に温泉が好きだつた)本人も非常に喜んで働いて居られ愛の巢まで作られたのであつたが昭和二年の財界不況のため同社も緊縮の餘儀なきに至り事務の加來氏より心に染まぬ事を云はれたと云ふので遂に同社を突然辭退され別府市田湯町に寓居せられたのである。此の出来事は程程本人からでなく事務の加來氏が懇々出神せられて私に傳へられたので私も驚ろいた位であつた。其後私も二三度別府の宅を訪問し就職する様すゝめたが別府の湯にひたりながら餘生を閉日月に送りたいと云ふ考を持つて居られたのでもう就職されぬか否かと考へたが然しもう一度君を働かせる見たい氣持で私一杯だつた。今日になつて憶へば君の一生を通じて最も幸福な生活は別府時代であつた。妻君を迎へられた祝に贈物をした時「いやありがたう。唯飯炊きを迎へたですよ」と如何にも家庭には無頓着の様子に見受けられた。

七轉び八起き

松尾君と私は影の形に添ふ如く幾度か逢ひ或は別れ御互に「七轉び八起き」の遭遇となり堅忍持久よく困難に堪へて來たのも不思議の縁と今考へて居る。君は別府に住居して居た時既に「最後の就職は片倉か那是、將又鐘紡でなければ」と決心して居られたが君の念願通り遂に片倉へ見事入社せられたので君の得意や又思ふべしと想像して居つた。大官製絲研究所より本社へと一歩一歩榮進と努力し居られるの時に不幸にも病魔に襲はれ殆んど全快に近き頃になつて急變死せられたとの事誠に氣の毒の至りである。君は年齢既に五十を越されて居たのは云へ愈々これからと云ふ男子働き盛りの時しかも何等かの事情で愛妻とも別離されたから一人淋しく散つて逝かれた。此云ふ事は返すがへすも惜しいものだ。此處にありし日の思出を記して安らかに眠られた君の英霊を感さめ且つ冥福を祈る次第である。

故手塚君を偲ぶ

町田 博



二月二十四日登校の際巡視から君の凶報を聞かされて啞然とした。手塚さんが戦死された。只此の短かい詞で送ら去つたのは何うしてか考へられぬ。新聞に改めて戦死の報導を見ても誤報ではないか、何處かに奮戦してゐるのぢやないかと淡い望みも持つて見た。然し二十六日には公電があつて二月十三日平漢線漢西方面馬湖黃山村附近の戦

な顔、あの彈力のある體に精力が満ちてゐて沈滞も挫折も知らぬ鋭氣、理非曲直を擲り潔白も、信じてらるゝやりに通ず根張り強き何れも今は只淋しい記憶にのみ残つた儂ないものとなつてしまつた。君は身體の頑健に加えて精力も豊富で頑張りも効く點では級でも人後に落ちなかつた。先づ級隊一のハリキリボーイだつた。だから運動會の應援リーダーとしての適役でも亦實によく奮闘もして居た。君にマラソンをやらせたら先づトップを切つて歸るだらうとは誰も思つた所だ。君のバツバの立廻り振は滑稽味には乏しかつたかも知れないが誰をしても奮起せしめずには措かぬ迫力があつた。二年の時の運動會に僕が忍耐競争で銃を胸前に捧げて苦戦してゐる時遠くの應援團の席から「マチー頭張れッ」と言つてく情深きものがある。

君は曖昧な事は嫌ひで黒白をはつきり付け安協すると言ふ様なことは嫌ひだつた。相談事も君が斯ふと言ひ出したら仲々譲らず通し抜くかきさもなくば全然放棄して吾れ闘争の恬淡な態度を探るかど時は吾れも困惑すること自らあつた。然し其丈に君は言ふことに自信を持つてゐたし亦熱心でもあつたのだ。

君は即決果斷而かも負ける事は先づ嫌ひだつた。だからやろうと思つた事があればどん／＼やつた。失敗もあつたらうがそれ丈に経験も豊富だつたと思ふ。先づ當つて見る。先づやつて見る。そして考察する工夫する風だつた。「失敗は成功の母」其の儘を生活に實行して君の進歩向上は確實だつた。母校の生理實驗に暫らくゐる時はよく下手な僕を誘つてくれて庭球をやつたものだが君は何うして勝たなければ治まらなかつた。そして負けた時の不快な顔は人一倍で、共に組んで負けた時などは氣の毒でもならなかつた。だから君は圍碁の場合も然らなかつた。だから君は圍碁の場合も然らなかつた。だから君は圍碁の場合も然らなかつた。だから君は圍碁の場合も然らなかつた。

君の論曲も亦思出の一つだ。卒業した年の八月愛知縣から兵役検査で歸つて來た時君の見事甲種合格を祝つて同六名で開いた席上三味も入つて唄聲轟然たりしに突如唸り出したのはその時が圍碁に勝つたものがあつた。僕には其の巧拙は解らないが聞いた事は幾度もあるから「うま

いな」とは感じた。聲は勿論好い。あの力のこもつた體の奥から出て來る聲は確かに論曲に適はしい音響のある聲であつた。それから幾度か君の其を聞いたが如何にも簡短しはなめらかで抑揚もよく、うまかつた。其の道の先生方が賞めて居られたから僕の感じた通りだつた。戦線にあつても暇のあつた時はきつと唸つた事もあつたらう。

君に逢つて親して語つたのは去年君の任地名古屋に汎太平洋博覽會のあつた時だつた。僕に詳細な案内状をくれて此の博覽會に是非來るよと言ふてくれた。丁度四月の休暇の時であつたし、行つた事も無いので何うして行く積りになり歸りに東京の農學大會へ出る豫定で出かけた。始めて名古屋、新装成つた驛に君は出迎えてくれて何んなに嬉しかつた事か。同輩稻葉君の新家を訪れたから君の下宿に寝た。君の部屋はよく整頓されてあつた。そして風流な調度品などを持つてゐて剛氣一方で素朴だと思つてゐたが案外靜かな情緒も君は持つてゐた。名古屋は君が卒業後の短かい社會生活の唯一の地なので、其の風習には全く慣れ、附近の事情にも明るく、其の土地の者の様に思はれた。蠶絲課と言ふ所も君の性格に合つてゐたし君も興味を以つて勤めてゐたし生活自身が樂天的であつた様に感ぜられた。

然し餘りにも君の生活は短かつた。「自分の部下も〇〇は戦死した。自分も何時死んでも心残りはない……」などと便りしてくれたが君の奮戦振りを自ら想像される。君はあの氣性だから戦線でも盡忠に燃え勇躍、獅子の猛りが如く縦横に活動されたらう。七月事變が始まると間もない動員に入隊まで日數の少ない忙はしき上田に歸り出征されたがあの軍服に白靴で挨拶に來られた姿は今尙あり／＼と眼前にある。何ぞ天運の短かりしぞ。皇國の爲名譽の戦死、永遠に尊ばれ護國の柱と成られたとは言へ實に惜しい君であつた。誠に痛惜の極みである。今や剛勇を異にしあの旺盛せる元氣と潑刺たる聲に接することの出来ぬ淋しさに君の在りし日を偲んでゐる。



手塚伍長の英霊を弔ふ

母校生理學實驗室一同

二月二十四日の東京日々新聞信州版紙上で北支隊に於ける遠山部隊の名譽の戦死者の芳名が報導せられた。...

君が現役兵から除隊後、約一ヶ年の間當校生理學實驗室に御在職あられ日夜研鑽の卓を同じうした昔日を憶ひ去る。...

新聞紙の報導によると君は二月十三日北支の野、洗馬湖附近の激戦で名譽の戦死を遂げられたとのことであるがその戦間に向ふ約五日間の第一線で認められた二月八日附の軍事郵便が私にとつては貴い絶筆となつて了つた。...

愈々今日二月八日から次期作戦の第一歩を踏み出しました。四十日間の〇〇の守備も他部隊に譲り再び第一線の攻撃前進に移ります。...

感服く趣味としてはスポーツ、寫眞術、讀書等であつたが、吾々の實驗室に於ては徹底的に奮勵せられたことは誰しも記憶に新たる所である。君が一昨年愛知縣蠶絲課に榮轉せられた後も着々とその名譽を博しつゝあつたことは當然と言はざるを得ない。...

達ちゃん

Q P 生

七月七日蘆溝橋一發の銃聲は極東の空を蔽ふ妖雲を纏つて電光の如く閃いた。遂に膺懲の寶劍は鞘を脱し日本朝野は猛然と立上り朝に夕べに名譽の召集に勇躍征途に登る勇士を送る軍歌の聲は全日本を蔽つた。...

見し「達ちゃん始めたアッ」と叫んだ。日々彼の武運長久と軍功を祈つてゐた。が去る日「手塚君戦死」の報に接ししげに茫然自失、昨夜書いたまだ出さぬ達ちゃん宛の便をポケットより出しこれを讀むてくれる彼今や無し。...

「一而非常に愛の心の強い友情に厚い男であつた。彼と私はごく親しかった。又それとなく喧嘩した。或る日登校の途に何か些細な事で喧嘩を始めた。...

「彼が親切に押さない奥深い男だ。彼は亦物凄く闘争心の塊であつた。それは無茶に見えた。蹴球の時など技術は自茶苦茶であつたが體を弾丸の様にぶつかつて行く。...

「何時まで起きてゐるのだ」「終るまで」ふり向きもせず平然と仕事をしてゐる。この實驗は十二時前に終つておいてやるのだ。...

「戰場に於ては愛の心強き者最も強し」戰場を親しく體驗した。陛下の御氣願が涙と共に語つた。陛下の御氣願だ。...

且つて人絹の躍進と蠶絲業の不況に呻吟せる時、轉向を畫せるもの三つあつた時、彼は言つた「醫師に愛兒の死を宣告された時、親はその最後の瞬間まで看護するものだ。...

「戰場に於ては愛の心強き者最も強し」戰場を親しく體驗した。陛下の御氣願が涙と共に語つた。陛下の御氣願だ。...

「戰場に於ては愛の心強き者最も強し」戰場を親しく體驗した。陛下の御氣願が涙と共に語つた。陛下の御氣願だ。...

「戰場に於ては愛の心強き者最も強し」戰場を親しく體驗した。陛下の御氣願が涙と共に語つた。陛下の御氣願だ。...

「戰場に於ては愛の心強き者最も強し」戰場を親しく體驗した。陛下の御氣願が涙と共に語つた。陛下の御氣願だ。...

會員動靜 (五月五日)

金子英雄(現職) 死亡 (勤)ナシ(住)名古屋昭和區菊園町二ノ三〇
奥井三郎(舊職) (勤)ナシ(住)名古屋昭和區菊園町二ノ三〇
市川龍哉(蠶二八) (改姓)岩下ト改ム、(勤)從前通り(住)北佐久郡御牧村八幡

投稿規定

一、内容は不問、平易なる學術研究、會員消息に關する物は特に歡迎。取捨は當方に一任せられたい。編輯の都合に依り全部又は一部を來月廻しとする事がある。

編輯室より

△金子先生が荷且の病にて突如長逝された。我國纖維科學界の第一人者であり母校の唯一のホープであつた此人の打撃は非常なものである。特に人絹に於て直接先生の御指導を受け且つ種々御懇懇に願つてゐた編輯子の悲しみ、落膽は又一

廣告規定

Table with columns: 寸法, 期間, 一月, 六月, 一年. Rows: 1頁, 1/2頁, 1/4頁, 1/8頁, 1/16頁, 1/25頁.

昭和十三年度蠶種案内

交雜種
× 龍華 仙江
× 國蠶支十九號
× 國蠶支一〇七號
× 國蠶支十六號
× 國蠶支十六號

小川保
電話市村局一四六番
振替(廣島)二四六番
振替(大阪)三三三番
電報は市村局別便配送料不要